

初詣に強欲な幼馴染から神社の裏へ連れ込まれ、

自分じゃ着直せない振袖の裾を捲られて、

逃げ場のない圧迫絶頂で中までぐちゃとろに暴かれました

序章 初詣、強欲な幼馴染

第二章 解かれた帯と、本当の始まり

エピソード 元日の朝、ぐちやぐちやな幸福。

序章 初詣、強欲な幼馴染

新しい年が明けて、まだ一時間。

深夜の空気は肌を刺すように冷たいけれど、参拝客の熱気と、屋台から漂う甘辛い匂いが、お祭り特有の昂揚感を煽っている。

「さすがに、ちよつと頑張りすぎたかな……」

成人式の時に着たっきりの、慣れない振袖の重みに耐えながら、ゆっくりと境内の入り口へ歩を進めていた。まあ正直に言えば、

後悔してる。着付けに三時間もかかり、帯は胃を圧迫して苦しい。歩幅は制限され、お手洗いに行くことすらままならない。

しかも、これから会うのは幼馴染。

でも……。

驚かせたかった。あいつに、「綺麗になった」って一言だけ、言わせたかった。着付けの間に鏡の前で、何度も練習した笑顔。いつもはメイクもしない私なのに、今日はプロに教わった通り。すべては、これから会う颯大のため。

いた。

ドキドキしていた。幼馴染に会うだけなのに……。

待ち合わせの鳥居のそばに、スマホを片手にした彼を見つけた。灯に照らされた横顔は、いつの間にか幼馴染という枠を超えて、一人の男としての色気を帯びて見え、私は思わず足を止めた。

「……颯大」

私の声に、彼が顔を上げてみる。その、ぶっきらぼうな表情が、私を捉えた瞬間にわずかに凍りつく。瞳が、足元から頭の先まで、熱を帯びたまま舐めるように動いた。

「へえ……着物、着てきたのか。似合ってるな」

きゅんっ♡

珍しく素直な言葉に、胸の奥が甘く跳ねる。

「えっ……」

苦勞して準備した甲斐があつた、なんて安堵したのも束の間。次の瞬間には、いつもの意地悪な笑みが彼の唇に浮かんでいた。

「まあ、お前みたいな、詰め物たつぷりの子豚ちゃん体型には、寸胴な着物がピッタリかもな。特にその……胸のあたりとか」

「ちよつと、口、わるっ！せつかくおしやれたのに……！」
「……ばーか、まあ、でも、頑張ったじゃん」

昔からそう。この憎たらしい男は、私を女として意識すると、必ず酷い言葉で隠そうとする。かれこれ二十年近く一緒にいても、この距離感だけは変わらない。

変わらない？ ……ううん。違う。

変えたくないと思っていたのは、私の方なのかもしれない。
このままずっと仲良くいれるのなら、それでいいと思っていた。

「なあ……」

「えっ？」

彼の視線が私の腰回りに固定された。獲物を見据えるような、低い熱を持った眼差し。

「……この帯、解いたらどうなるんだ？」

「や、やめてよね。これ、自分じゃ絶対に着直せないんだから！ 解けたら終わる！」

必死に叫ぶ私を見て、彼の瞳がさらに深い色に沈んでいく。

「……へえ。脱いだら最後か。一人じゃもう着られないわけだ」
「何言ってるのよ！ ほら変な事言ってるで、お参りしよ……」

「その前にさ」

「ん？」

「自分でしつかり、帯握つとけよ。逃げ出す余裕なくなるから」
「へっ？ きやつ！？ まつて、なに！？」

言い終わる前に、私の手首が力強く掴まれた。返事も待たず、参拝客の列とは反対方向、深い木々に覆われた社殿の裏手へと、私を引きずり始めた。

「ちよ、なによ」

「いいから、来いって」

ザシユザシユツ。

砂利を踏む音が、騒がしい境内から遠ざかっていく。

「ちよつと、颯大！ みんな見てる……！」

「だれも見えてねえよ。みんな自分たちの願い事に夢中だ」
「どこいくのよ！」

石段を下り、街灯の届かない神域の隅へ。立ち止まった彼に、私の身体がドンとぶつかった。分厚いコート越しからも伝わる、逞しい背中の中、熱。

「ちよつと。どうしたの？」

振り返った颯大の目は、もう幼馴染のそれじゃなかった。

「……なんで、おまえ、そんなおしやれしてきたんだよ」

「いいじゃない。初詣くらい、おしやれしたって」

「……俺に見せるために着たんだろ？」

その言葉に、心臓が跳ねる。

「そんなわけ……」

「ほら、もっと近くに来いって」

言い返そうとした唇を、彼の低い声が封じた。

「ちよつとだけ、触っていいか」

「はあ？ 何言ってるの……っ」

「いいじゃん。少しくらい」

耳元で囁かれ、熱い舌先が耳朶をれろつと舐め上げる。

「はっ♡ まって、どうしたの颯太……」

ぞくり……と背筋を走った興奮。思わず見上げる颯太の顔は、何かを覚悟したような、強い意志に満ちていた。いつも通りに、「冗談だよ」と笑ってくれるのを期待していたのに、違ふみたい。彼は私の退路を断つように、強引に唇を重ねてきた。

ちゅぷ……んっ、は……っ。

いきなりのキスだった。それは、子供の頃の遊びとは違って、深く、熱く、奪われるようなキス。頭の中が真っ白になる。

「んっ……は」

ちゅ、ちゅぽ。

思わず、体を押して遠ざける。

「ちよつと……！ なにしてんのよ、外なのに！」

「……もう、我慢できねえ。お前、めっちゃ可愛い」

彼の大きな手が、私の腰をぐつと引き寄せた。恥ずかしいのに、私の心は裏腹な反応を返してしまう。

「ちよ……とお……」

襦袢の下で、蜜がじわりと溢れ出すのが分かる。

……とおお……
♡

やば！ 不覚にも反応してしまってる。

「その……着付けの下がどうなってるか、見せてくれよ」

「だめだつて！ 着物は自分で着られないのつ、汚しちゃうし！」

「……脱がせない。捲り上げるだけ。ほんと、ちよつとだけ……」

「だめだつて」

「なつ。ちよつとだけ」

颯大の手が、私の膝あたりで着物の裾を掴んだ。

「ちよつちよつ！」

裾をめくられ。冷たい冬の空気の中に、私の太腿が晒された。彼の熱い指先が、震える内腿へと這い上がってくる……。

「……っ、ひゃあっ……!!」

冷たい冬の空気が、捲り上げられた着物の裾から一気に侵入し、太腿を撫で上げた。外気に晒された肌が栗立ち、寒さに震える。

「……寒いか？でも、ここ、こんなに熱いぞ」

「やめて。なんで、急に」

「ずっと我慢してたんだよ。もうずっと前から」

彼の指がするすると上にあがり、パンティ越しに股間の中心の、すでに蜜で、ぐっしよりと濡れそぼった部分に触れる。

「あ、あ……っ、だめ、そんなところ……さわっちゃっ」

「ここ、濡れてんじゃん、なあ、触ってもいいだろ？」

だめじゃない……けど、こんなところで……？

意地悪な言葉と共に、指がパンティの股間部分を横にずらした。逃げようと腰を引こうとするが、帯がぎゅつと腹部を締め付けて、思うように身体が動かない。

くちゅう♡

「あっ……んうっ……！　だめえ」

「大人しくしてろって。暴れると、着物乱れるぞ」

着物の帯は、深く呼吸をするだけで精一杯なほど締められてる。颯大に抵抗しようと身体をよじれば、そのたびに帯が食い込み、肺から空気が押し出される。その苦しさがかえって脳を痺れさせ、快感を何倍にも増幅させていた。

ちゆくつ。ぴちやあ♡

そして颯大の指が、剥き出しになった私の肉蕾に直接接触れた。

くりゆつ……♡